



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集 青の魅惑

vol. 22 | 季刊 冬
2012



どんなに深く憧れ、どんなに強く求めても、青を手にはできない。すくえば海は淡く濁った塩水に変わり、近づけば空はどこまでも透き通る。人魂もまた青く燃え上るのではなかったか。青は遠い色。

谷川俊太郎 (出典：色の息遣い「青」、手紙、集英社、1984年)

青の魅惑

—イラン・トルコ・ウズベキスタンのやきもの

西・中央アジアの旅先で

圧倒的に際立つ青いタイルに魅かれ、その文化を調査・紹介している

神保裕子さん*1は、ウズベキスタンの著名な陶芸作家、アリシェル・ナジロフさんから聞いた言葉に胸が躍ったという。

「ユーラシア大陸の青は各地で少しずつ違う。青の道、『コバルトロード』と呼べるかもしれないね。イラン・トルコ・ウズベキスタンへのやきもの旅は、こうして始まった。

*1 神保裕子氏は、企画展「青の魅惑—イラン・トルコ・ウズベキスタンのやきもの」のコーディネーター。



INAXライブミュージアムは、東日本大震災の復興を支援しています。

01 [特集] 青の魅惑

—イラン、トルコ、ウズベキスタンのやきもの

LIVE SCHEDULE

- これからの催し
- 05 企画展 青の魅惑—イラン、トルコ、ウズベキスタンのやきもの
- 06 企画展 青—空と水とやきもの始まり
アート・ワークショップ 土と足で遊ぶ アート体験
予約なしで、気軽に体験! 光るちびだんご
2012年春、
建築陶器のはじまり・資料館とテラコッタパーク 新設

TOPICS

- 07 窯のある広場・資料館1階 リニューアルオープン

LIVE REPORT

- 08 開催報告
だいすきトコナメ・アート展〜トイレはみんなの舞台だ!〜
スライド&トーク シルクロードの暮らしとやきもの
陶と灯の日 過去への感謝。未来への希望
光るどろだんご全国大会2011

CONTENTS

INAXライブミュージアム
NEWS LETTER

vol.22 | 季刊 冬
2012

表紙写真

親子3人で、ふらりと訪れたライブミュージアム。「近くに、こんな素敵なお店があったんですね」。この次は、光るどろだんごやタイルの絵付けで、楽しいひとときを過ごしてください。

(2011.11.23)

表紙撮影：加藤弘一

常滑から*

21

常滑の和菓子



写真は、市内の和菓子屋さんのもの。季節感があって、いつもおいしい。いつも美しい。

常滑のある家庭を訪ねた時、いきなりお抹茶を出されて面食らったことがある。一緒に行った常滑育ちの同僚は、こともなげに「いただきます」。私も泰然としていたのだが、内心は汗がたっただけに思う。

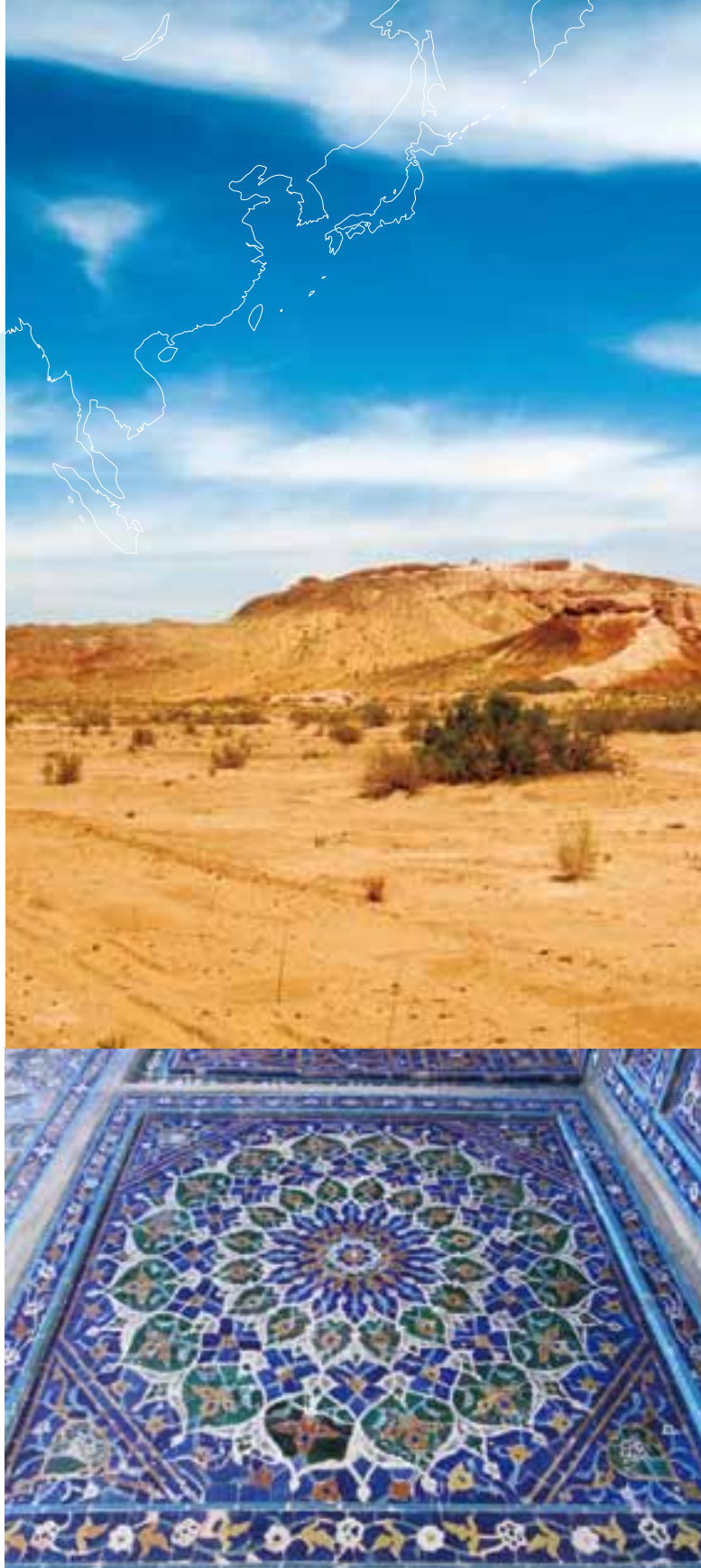
急須作家のところにいくと、素敵な急須でゆったり淹れたお煎茶とお菓子をいただくことも多い。窯元では窯焚きの合間に、餅や和菓子をいただくことが多く、今も〇〇餅という和菓子屋さんが多いのはそういう歴史かららしい。

おいしい和菓子とお茶をいただく、なんと至福のごちそう。日本人の至福は時間をかけて味わうことだったように、お煎茶も3〜4分かけてゆつたり淹れる。3〜4分がとて長く感じるのはあわただしい暮らしに慣れてしまったからだろう。時間をかけたお茶のおいしさ、甘さは筆舌に尽くしがたい。

常滑で作る茶器や和菓子は、豊かな時間をつくるきわめて文化的なものであることを痛感している次第である。

辻孝一郎 (館長)

* INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。



ユーラシア大陸を結ぶ「コバルトロード」

遙か太古の昔から、広大なユーラシア大陸を東西にかけて、人や物資が行き交った。主要都市を結ぶ幾本もの道の総称が「シルクロード」だ。東の起点は中国「長安」、陸路の西は「コンスタンチノープル」。何が人々を旅路に駆り立てたのだろうか。長年、西アジアで発掘研究を続けた陶芸家・故加藤卓男さんは、こう記している。

『茫漠たる砂丘の連なりと、目もくらむような炎熱、そして時として襲い来る狂ったような砂嵐（中略）：遠い単調な旅路に耐える強靱な意志、飽くことのない人間の欲望、金、征服、宗教心、これらの底しれぬエネルギーによって古代からシルクロードによる交流がなされてきた。』（出典：イスラーム・タイル考『イスラームのタイル―聖なる青―INAX出版）

マドラサ（神学校）の壁面を彩るモザイクタイル（ウズベキスタン・サマルカンド）。青色を中心に緑色や茶色を用いて複雑で繊細な幾何学模様を描く。コバルトブルー、ターコイズブルーを中心とした青色の濃淡で絵画的な陰影をつくり出している。

*2 加藤卓男氏（1917年～2005年）陶芸家。古代ペルシア陶器の斬新な色彩や独創的な造形、釉調に魅力を感じ、西アジアで長年の発掘研究を行った。幻のラスタール彩の復元をはじめ、青釉、三彩、ペルシア色絵の作品制作を通して、高い芸術性を持つ異民族の文化と日本文化との融合に終生挑み続けた。三彩において、人間国宝（国指定の重要無形文化財保持者）の認定を受けた。

果てしなく続く茶色の土の上で、旅人たちが見ていたのは、刻々と姿を変える空（宇宙）ではなかったか。薄青から紺碧へ、やがて光と闇が交錯し群青色に染まる空。穏やかな旅路を包み込む「青」は神秘であり、オアシスの緑やそこに住む人々の息づかいと同様に、大きな歓びではなかったか。そう思えるほどに、シルクロードの各都市は今も、歴史に彩られた独自の「青」をもっている。

中央アジアの紺碧の空・ウズベキスタン

ユーラシア大陸の中央にあるウズベキスタンのオアシス都市は、古代からシルクロードの中継地だった。サマルカンドは14世紀末～15世紀にティムール帝国の首都として繁栄。「青の都」「イスラーム世界の宝石」と呼ばれるように、青のタイルが建物の内外を埋め尽くす、イスラーム建築の精華ともいえる美しい都だ。青の建造物は周りの砂漠によく映え、中央アジアの紺碧の空のように、強く明るく輝く。かすむ砂漠の向こうに、オアシスの町の青いドーム屋根を見つけたシルクロードの旅人たちはどんなに安心し、元気をもらったことだろう。

中世から続く陶芸産地として名高いリシタンは、ウズベキスタン東部、キルギスとの国境沿いの小さな町だ。「砂漠に水があると、嬉しくなると同時に心が落ち着く。陶器の青もそれと同じことです」と、絵付けの匠、ルスタム・ウスマノフさん。陶芸作家、アリシエル・ナジロフさんも「青は活力、生命力、愛情、感謝など、すべての心の動きを活性化する、幸福と勝利をもたらす聖色です」と言う。現代の陶工たちがつくる作品も、伝統的な青と様式的な模様を踏襲しながら、根源的な、素朴な、人間の感性を感じさせてくれる気がする。

イランの青「ターコイズブルー」

北にカスピ海、南にペルシア湾をのぞみ、国土の西には大山脈や高原が、東には広大な砂漠が広がるイラン。ペルシア帝国繁栄の歴史を受け継ぎながら、独自のイスラーム国家を



ルスタム・ウスマノフ
(ウズベキスタン・リシタン)



アリシエル・ナジロフ
(ウズベキスタン・リシタン)



ウスマノフ工房

アリシエル工房

ウズベキスタンでは「師匠と弟子」の関係が大切に継承されている。荒れ地に生える低木の灰からつくられる伝統の天然釉薬「インクル」の調合と使い方は、一定の段階に到達した弟子にのみ伝承されるという。

築いてきた。町中のモスクの外壁やドームは青いタイルで華麗に彩られる。

「世界の天井である空は青い。ゆえに、神の家であるモスクの天井のドームは青になりました。神様の色、神聖な色、地球の色。イスラームの世界観を表すものとして青に意味が出てきたのです。イラン出身の陶芸家、サプーリ・ティムールさんは言う。『壮大な人類の文化を宿して、『青の遺伝子』は脈々と息づいている。』

イランの青は、トルコ石の「ターコイズブルー」だ。約6000年前から採掘され、エジプトの王の墳墓も飾る緑があった青。ペルシア語では「希少で貴重なもの」を意味する「フイルゼ」と呼ばれる。「至高のフイルゼは自然のトルコ石の色」と、ムハンマド・マフディ・アヌシュファルさん。「フイルゼは命の根源、水をも意味します」と、サイド・アクバリー・ソヒさん。いずれもテヘランの現代陶芸家だ。彼らの作品からも、空と水―「青(フイルゼ)」は今なお瑞々しく迫ってくる。

天竺の石、そよ Blue&White

黒海と地中海に面し、アジアとヨーロッパにまたがるトルコは、シルクロードの西の果て。東西文化が交差する地だ。12世紀セルジューク朝時代、建築装飾として用いられたタイルの色は主にターコイズブルーとコバルトブルーだった。ともに、天然に産する貴重なトルコ石やラピス・ラズリの色をやきもので再現するために、銅やコバルトからできた顔料を使った。

ラピス・ラズリの色であるコバルトブルーは、地中海にふさわしい、強く明るい青だ。夜空のような輝きを持つラピス・ラズリは、ラテン語の「石」(Lapis)とペルシア語の「空」(Azul)の合成語で、まさに「天竺の石」を意味し、古代エジプト時代から宝石としても用いられてきた。主としてアフガニスタンで産出され、純金と並ぶ価値で流通していた貴重品だ。

9世紀頃、酸化コバルトの顔料で描かれたペルシアの染付陶器が、酸化コバルトとともに陸路中国に伝わった。そして



14世紀の中国(元)で、白い地肌に映える青で図柄を描く染付磁器「青花(Blue&White)」として完成し、景德鎮などでその最盛期を迎える。オスマントルコの時代になると、スルタン(君主)たちは競ってそれらを求め、また各地で盛んに染付のコピーが作られるようになった。白く焼けない土質ゆえに、白化粧土を施して白い地肌をつくりだすなど、さまざまな工夫が生まれた。

たとえばトマト赤が有名なトルコの名窯イズニックは、15世紀後半から澄んだ白い肌を持つ中国磁器をめざし、次第にトルコ人の趣味にあったBlue&White様式が洗練されていったのだ。「作家が熟練すればするほど、使う色数が減っていく」というトルコの

言葉はまさにBlue&Whiteを表している」という陶芸家、メフメット・コチェルさんの言葉はそれを示しているだろう。また、ビザンティン時代からのタイルや陶器を伝統的な材料と手法で再現しながら、個性的な作品をつくり続けているアディル・ジャン・ギヴェンさんも「青は深遠でありながら自由そのもの。困難の末に得られる高貴の色」と語る。

気の遠くなるような長い時代、ユーラシア大陸でつづられ続けた青いやきもの。それらはつながり合い、影響し合い、独自の風土に育まれて現在に至る。企画展「青の魅惑―イラン・トルコ・ウズベキスタンのやきもの」(2011.11.3〜2012.3.20)で、悠久の歴史の一端に触れていただけたらと思う。

参考文献 「イスラームのタイル―聖なる青」I・N・A出版 1992年、「青の美術史」小林康夫著 平凡社 2009年、「別冊太陽 染付の粋」平凡社 1997年(写真提供/神保裕子ほか)



ラピス・ラズリ 深いブルーのなかに白(方解石)や金色(黄鉄鉱)の斑点が浮かび上がる。人々を魅了し、多くの伝説を生んだ。



ムハンマド・マフディ・アヌシュファル (イラン・テヘラン) 濃い空色は、セルジューク朝イランの青として特徴的な色。土の窯で木を燃料に低温で焼く伝統的な技法でつくられている。模様も伝統的なもので、ミハラブ(メッカ・カアバ神殿の方向を示すくぼみ)などモスクの重要な場所を飾るタイルに使われた。



サイド・アクバリー・ソヒ (イラン・テヘラン) イランでのターコイズブルーの概念は、9世紀頃のやきものに見られる青緑系の色合いまでを含む。「(オブジェ)緑色の釉薬下に見える青色こそが、自分が考えるイランの青」と、作者。

右上/アディル・ジャン・ギヴェン (トルコ・イズニック) ビザンティン時代から続くアナトリアの伝統技法で再現した作品



右/メフメット・コチェル (トルコ・キュタフヤ) 構図、模写ともに極めていてねいで、伝統様式の中にも自分らしさを表現している。



青の魅惑―イラン、トルコ、ウズベキスタンのやきもの

好評開催中 ～3月20日(火・祝) ●会場/世界のタイル博物館 企画展示室

古来受け継がれた「青の遺伝子」が今も息づくイラン、トルコ、ウズベキスタン。特集で紹介した3つの国の現代作家6人による、作品85点を紹介しています。目に飛び込んでくる美しい青のやきもの。しかしよく見ると、微妙に異なる青の多彩さに驚き、青いやきものを育んだ風土、込められた青への思いを感じとることができます。日本では紹介されることの少ないこの地域の現代のやきもの。見ているだけで、はるか遠いシルクロードへと誘ってくれます。



企画展